

『とほずがたり』の疑問表現(上)

——要説明疑問表現の場合——

磯 部 佳 宏

— はじめに

筆者は、これまで、古代日本語の疑問表現について、『源氏物語』¹⁾『今昔物語集』²⁾「寛一本 平家物語」を資料として考察してきた。疑問表現を「要説明」と「要判定」の二種に大別し、さらにそれぞれいくつかの形式に分類して、各々の形式の性格、そしてその史的変遷についても、ある程度明らかになったと考えている。

ただし、一般的に行なわれている、院政期の日本語研究について、森野宗明氏が、

位相論的見地からみると、いわでものことながら、「源氏物語」等、女流の宮廷貴族社会を背景にした作品を中心にしてとらえられる言語事実と、「今昔物語」「大鏡」といった男性の、広範な層に及ぶ世界を取材素源とした作品によってとらえられる言語事実とをむざむざに直結させ、その間に見出せる差異をそのまま、時間的変遷として処理することが十全的なとらえ方といえるかどうか、はなはだ疑問である。

のように指摘される問題点が当然存在するため、別稿³⁾では、院政期の資料として『讃岐典侍日記』を取り上げ、『源氏物語』や『今

『とほずがたり』の疑問表現(上)——要説明疑問表現の場合——

昔物語集』における疑問表現の用例との比較を行なった。

この稿では、中世の女流日本文学『とほずがたり』を取り上げ、その疑問表現について、主として「寛一本 平家物語」の場合との比較を試みてみたいと思う。

『とほずがたり』は、周知の通り、伝本が孤本であり、本文研究が困難な点から、言語資料として扱うには注意が必要であるが、最近では注釈書の類も多くなり、また総索引も刊行されるなど作品研究が進んできている。そして、作品内容が中古の宮廷女流作品の延長線上にあること、また相当の分量があることから、当作品を中世の言語資料として取り上げることの意義は決して小さくないと考えられる。(テキストは「完訳日本の古典 とほずがたり」(小学館)。本文引用の際は、句読点など私意により改めた場合があり、また、心中思惟の部分にはへんを付した。なお、「とほずがたり 総索引」(笠間書院)も参照した。)

ところで、以前、筆者は、不定語「いかで」の用法について、助詞の付加した「いかでか」「いかでかは」も含めて調査したことがある。⁴⁾「いかで」には、希望・疑問・反語の三用法があり、中古

の『源氏物語』などでは、特に助詞の付加しない「いかで」の場合、希望表現の用例がもつとも多いのであるが、『とはずがたり』では希望表現の用例が全く存在しない。また、「いかでかは」の形は全くみられず、大半が「いかでか」の形で、その場合、全例が反語表現となっている。これらの特徴は『覚一本 平家物語』の場合と全く共通であり、中世的な用法を反映したものであろうと考えられた。また、

(1) こ、にありとも、いかでかき、給ふべきに、せうじがこももとにて、「……」といふ。(巻三)

のように、「いかでか」の係る述語文節で文の完結しない例がみられ、『覚一本 平家物語』においても、

(2) 「……。其恩、争かわするべきなれば、子息たちもおろかにおもはず。……」とぞ、の給ひける。(巻第十 藤戸)

のように、文が完結せずに「なれば」に接続している用例がみられた。しかし、「いかでか」の文末語についてみると、『覚一本 平家物語』の場合は、「ベシ」が圧倒的に目立つのに対し、『とはずがたり』では「ム」の方がはるかに多く、両者に相違がみられた。

以上の結果も踏まえながら、本稿では両作品の要説明疑問表現一般について比較考察していききたい。

二 要説明疑問表現の諸形式

表1は、当作品の要説明疑問表現を次の諸形式に分類し、それぞれ用例数を示したものである。なお、和歌における用例・底本に見られる注記における用例は除外した。

【表1】

96	a
46	b
2	c
37	d
20	e
4	f
64	g
4	h
35	i
35	j
25	k
2	l
3	m
1	n
374	計

A文中用法の「カ」に関わる形式

(a) 疑問詞 (……) カ。

係助詞「カ」が断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接して「ニカ」の形となっている場合は、別の形式として除外する。

また、疑問詞として「イカガ」が使用されている場合は、その語構成要素に係助詞「カ」が含まれていることから、この形式の中に含める。

(b) 疑問詞 (……) カ。

(a)形式の係助詞「カ」以下が省略されているもの。また、「いつかわが身も亡き人数に。」(巻三)のように、「カ」で終了していなくても、文末の省略されている場合を含める。

(c) 疑問詞——ニカ——。

係助詞「カ」が断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接しており、かつ「ニカ」以下の省略されていないもの。

(d) 疑問詞——ニカ。

(c)形式の「ニカ」以下が省略されているもの。

(e) 疑問詞 (……) カハ——。

(a)形式の係助詞「カ」に、さらに係助詞「ハ」の下接しているもの。また、「イカガハ」の形を含める。

(f) 疑問詞 (……) カハ。

(e) 形式の「カハ」以下が省略されているもの。

B 文末用法の「ゾ」に関わる形式

(g) 疑問詞——ゾ。

「こは誰を。」(巻二)のような、「タソ」の形も、この形式の中に含める。

(h) 疑問詞 (……) カーゾ。

文中に係助詞「カ」が使用されていながら、文末にさらに助詞「ゾ」の存在しているもの。

C 疑問詞のみを使用する形式

(i) 疑問詞——。

疑問詞のみで、文中にも文末にも助詞の存在しないもの。

(j) 疑問詞。

「後はいかに。」(巻二)のように疑問詞で文が終止しているもの。

また、「いつまで同じながめを。」(巻三)のように、疑問詞で終止していなくても、文末の省略されている場合を含める。

D その他の形式

(k) 疑問詞——ヤラム。

文末に複合辞「ヤラム」が使用されているもの。

(l) 疑問詞 (……) ヤ——。

(a) 形式の助詞「カ」の代わりに、助詞「ヤ」の使用されているもの。

(m) 疑問詞 (……) ヤ。

(b) 形式の助詞「カ」の代わりに、助詞「ヤ」の使用されている

「とはずがたり」の疑問表現(上)——要説明疑問表現の場合——

もの。

(n) 疑問詞——ニヤ。

(d) 形式の助詞「カ」の代わりに、助詞「ヤ」の使用されているもの。

三 「疑問詞 (……) カー——」の形式

表2は、当作品にみられる(a)形式全96例について、文末の形を用別別にまとめたものである。

【表2】

	ム	ケム	ラム	マシ	ムトス	ベシ	0	計
疑い	12	8	3	3		1	1	28
問	1		1	1		10	8	21
反語	28				1	18		47
計	41	8	4	4	1	29	9	96

なお、表中の「0」は、文末に推量の助動詞や終助詞の含まれていない場合を示す。また、「疑い」「問い」という用語の概念については、会話文において、対話相手に対して解答を要求しようとする姿

勢のみられるものを「問い」の表現と考へ、それ以外はすべて「疑い」の表現と考へる。したがつて、会話文で用いられていても、相手に積極的に解答を求めているとは思われない場合は「問い」の表現とは考へないし、心中思惟における用例は、自問自答の色彩の強く感じられる場合も含めて、すべて「疑い」の表現であると考へる。

この形式の場合、狭義の疑問表現よりも反語表現の用例が目立つが、その割合は「覚一本 平家物語」よりもかなり低く、「源氏物語」の場合に近い。また、反語表現の際の文末語は、「平家物語」では三分の二以上が「ベシ」であつたが、当作品では前述の「いかでか」の場合と同様に「ム」の方がむしろ多い。「源氏物語」では「ム」が圧倒的多数であつた。

(3) さるほどに、あちこち尋ねらるれども、いづくよりかありと申すべき。
(卷一)

(4) へかくて世に経る恨みのほかは、何事か思ひはべらむ。……と
思へども、
(卷四)

(5) また御婦、「あなまがまがし。誰か参りさぶらはむ。御幸ならば、また何ゆゑか忍びたまはむ」など言ふも、
(卷一)

また、この形式の反語表現には、前掲の用例(1)以外にも、
(6) されども、いかでか知らむに、わが常に居たる方にも、なべてならぬ屏風立て、小几帳立てなどしたり。
(卷一)

(7) なごりいかでかおろかなるべきを、つくづくと案じつづくるに、
(卷五)

(8) あはれもなか深からざらむなりしを、思ひあへざりし世のつらさを嘆く隙なさに思ひ分かざりしにや。
(卷三)

(9) 心の内のあらましもなか思ひよらざるべきなれども、棄てて無為に入るならひ、定まれる世のことわりなれば、
(卷四)

のように、係助詞「カ」の係る述語文節で文の完結しない形が4例みられるが、いずれも地の文における用例である。

狭義の疑問表現の場合、文末に推量の助動詞の存在しない形式は、10例中9例までが会話文中で使用され、

(10) 大納言の北の方、尼上など来て、「いかに。なかか起きぬ」など言ふも悲しければ、「夜より心地わびしくて」と言へば、
(卷一)

(11) 善勝寺ぞ、「さてしもあるべきかは。医師はいかが申す」など申して、たびたびまうで来たれども、「ことさら広ぐるべきことと申せば、わざと」など言ひて、見参もせず。
(卷一)

(12) 作者「勤めには何事かする。いかなる便りにか発心せし」など申せば、ある尼申すやう、「……」など言ふもうらやまし。
(卷五)

のように、「問い」の表現として使用されている。ただし、『平家物語』の場合と同様、用例数そのものが、後述の(g)「疑問詞——ソ」形式による「問い」と比較するとはるかに少ない。

文末に推量の助動詞が存在する形式については、「ベシ」の場合には、

(13) その夜やがて、彼にもおほしつづ、(作者)「いかがすべき」と言ふほどに、「まづ大事に病むよしを申せ。……」などとぞ添ひ居て言はるれば、
(卷一)

(14) 作者「何とか申すべき」と申せば、(前斎宮)「思ひよらぬ御言の業は、何と申すべき方もなくて」とばかりにて、
(卷一)

のように、「問い」の表現として使用されている例が多いが、他は、
(15) これさへ今日は心にかかりつつ、へいかが聞きなきむ」と悲し。
(巻二)

(16) (有明の月)「……」など仰せらるるも、へいかなる方にか世に洩れむ」と、人の御名もいたはしければ、
(巻三)

(17) 紋りもあへざりつる御涙は包む袂に残りあれば、へいかが御覧じ咎むらむ」とあさましきに、
(巻三)

(18) 「ほかの散りなむ後」とは、《誰か教へけむ》とゆかしきに、
(巻三)

(19) この入道下り会はざらましかば、いかなる目にか遭はまし。主にてなしと言ふとも、誰か方人もせまし。さるほどには何とかあ
らまし」と思ふより、修業も物憂くなりはべりて、
(巻五)

のように、心中思惟における「疑い」の表現の用例が目立つが、「ケム」の場合は、
(20) 心の内の物思ひ、やる方なけれども、かくともいかが言ひけむ、
神業にことづけて、里がちにのみ居たれば、
(巻二)

(21) (作者)「……」と申す折、いかがおほしめしけむ、しばし物も仰せらるることもなくて、
(巻四)

なお、「平家物語」においては、
(22) 「又天下いかなる事が出こむずらむ」とて、京中上下おそれおの、
(巻第三 行隆之沙汰)

のように、将来起こり得る憂慮すべき事態に対する、言語主体の恐れ・嘆き・悲しみ等の表現として多用されていた「ムズラム」の形

『とはずがたり』の疑問表現(上)——要説明疑問表現の場合——

はみられない。

(a)形式の文末の省略された、(b)形式の場合、
(23) (隆頭)「……」など申せば、《我もげにいとど、何をか》となごり惜しさも悲しきに、
(巻二)

(24) 明けゆけば後朝になる別れば、へいつの暮れをか」と、その期遥かなれば、
(巻三)

のように、心中思惟における用例が全46例中30例と目立っている。また、(a)形式の係助詞「カ」に、さらに係助詞「ハ」の下接した、(e)形式の場合、全例が反語表現として使用されており、地の文における用例が目立つが、その文末語は、(a)形式の反語表現の場合と同様、

(25) 《今宵ぞ限り》と心に誓ひ居たるは、誰かは知らむ。
(巻二)

(26) 身の毛も立ち、心もわびしきほどなれど、さればとて何とかはせむ。
(巻二)

のように「ム」が15例と多く、「ベシ」は4例のみだが、そのうち1例は、
(27) 人の身に命に過ぎたる宝、何かはあるべきを、君の御ためには捨つべきよしを思ひき。
(巻五)

のように、「カハ」の係る述語文節で文の完結しない形である。なお、(a)形式の助詞「カ」の代わりに、助詞「ヤ」の使用されている(1)形式が2例みられるが、いずれも、
(28) (院)「憂き世の中に住まむ限りは、さすがに憂ふることのみこそあるらむに、などやかくとも言はで月日を過ぐす」などうけたまはるにも、
(巻五)

のように、「などや」の形で、会話文において「問い」の表現として使用されている。また、この(i)形式の文末の省略された形の(m)形式も3例みられるが、やはり、いずれも「などや」の形で、2例は、(29)〔院〕「などや」とさへ仰せ言あるぞ、まめやかに悲しき。(巻一)のように、会話文において「問い」の表現として使用され、1例は、(30)へ……とこそ思ひまゐらすに、へなどや」など、御おぼつかなくおぼえさせおはしまししほどに、(巻五)

のように、心中思惟において、「疑い」の表現として使用されている。中世になると、助詞「ヤ」が「カ」の代わりに、要説明疑問表現における文中用法として使用された例が、かなり一般的にみられることが指摘されているが、当作品では、このように、中古においても用例の報告されている「などや」の場合に限られ、「などか」の形が反語表現に片寄るのに対し、狭義の疑問表現として使用されている。「平家物語」においても、文中用法の「ヤ」を使用する形式が全11例みられたが、うち5例は「などや」の形で、しかも、狭義の疑問表現としての用法ばかりで、反語表現の例はみられなかった。その他の例でも、反語表現となるのは、わずかに1例のみで、このことから、この「ヤ」は「カ」とは明らかに性格が異なり、むしろ問投助詞的性格が強いと考えられた。

四 疑問詞のみを使用する形式

表3は、当作品にみられる(i)形式全35例について、文末の形を用別にとまとめたものである。

文中の助詞「カ」を使用する(a)形式の場合、前述のように、狭義

【表3】

	ム	ケム	ラム	マシ	ムズラム	ベシ	〇	計
疑い	14	3	7	2	1	1		28
問い	4					1	1	6
反語						1		1
計	18	3	7	2	1	3	1	35

の疑問表現よりも反語表現の用例が目立ったが、この(i)形式の場合、反語表現とみられるのは、

(31) 思ひよらぬほどのことなれば、何と答へ言ふべき。言の葉もなくあきれ居たるほどに、(巻一)

のように、文末語として「ベシ」の使用されている、地の文における用例1例のみで、大部分は、

(32) 心強くて明かしたまはば、へいかにおもしろからむとおぼえしに、(巻一)

(33) 契りありてこそさるべき家にと生まれけめに、へいかなる報いならむと思ふほどに、(巻四)

(34) へなどあながちに、かうしも情なく申しけむと、悔しき心地さ

へして、

(巻二)

(35) 御垣の内の桜は今日盛りと見せ顔なるも、誰がため匂ふ梢なるらむ」とおほえて、

(巻四)

のように、心中思惟において「疑い」の表現として使用されている。なお、『平家物語』では目立ったが、当作品の(a)形式においては用例のみられなかった、文末表現「ムズラム」の形が、この形式には、(36) (父)「何とならむずらむは」と言ひも果てず、……、年五十にて隠れたまひぬ。

(巻一)

のように、1例みられる。また、

(37) 思ひあへず、誰なるべし」ともおほえず、仏の御前の明り障子をちと開けたれば、

(巻二)

のように、文末語「べし」が終止形の形で使用されている例が1例みられる。

次に、(j)形式の場合、全35例中、24例までは、

(38) 御所よりは、「さのみ里住みも、いかにいかに」と仰せらるるにも動かれねば、

(巻一)

(39) そはなる明り障子を細めて、「……」と言ふを見れば、雪の曙なり。
〈こはいかに〉と、今さら胸も騒けども、何かはせむ。(巻二)

(40) うちおどろきて、汗おびたたくし垂りたまふを、「いかに」と申せば、「……」など仰せられて、

(巻二)

のように、「いかに」が単独で使用されているか、「いかに」の形が文末となっているものである。

五 「疑問詞——ニカ。」の形式

『源氏物語』においては、文中用法の助詞「カ」を用いる要説明疑問表現のうち、断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に「カ」が下接し、「ニカ」の形となっている、(c)・(d)形式が多用されていた。これらの形は、築島裕氏が「訓点には殆ど見られないやうである」と指摘されていることから、中古和文に特徴的な表現であると考えられた。そして、『寛一本 平家物語』には、これらの形式は全く存在しなかった。

当作品の場合、(c)形式は、

(41) と馴れ顔に入りおはしまして、(院)「悩ましくすらむは、何事にかあらむ」など御尋ねあれども、御答へ申すべき心地もせず、

(巻一)

(42) 死ぬばかりにおほえて居たるに、(雪の曙)「御尋ねの白物は、何にかはべる」と尋ねらる。

(巻二)

のように、会話文において「問い」の表現として使用されているとみられる2例のみであるが、(42)の用例は、対話相手に対する敬語表現を含む形である。これに対して、「ニカ」の形で文の終止している(d)形式は全37例存在している。そのうち、半数以上の20例までは、心中思惟における用例で、

(43) 〈いと〉思ひがけぬ夢をも見つるかな」と思ひて居たるに、そばなる人、同じさまに見たるよしを語るこそ、へいかなるべきことにか」と不思議なれ。

(巻一)

(44) 明けゆく鐘に音を添へて、起き別れたまふさま、へいつ習ひたまふ御言の葉にか」と、いとあはれなるほどに見えたまふ。

(卷二)

45(有明の月)「……」とて、しばし引き留めたまふも、へいかに洩るべき憂き名にか」と恐ろしながら、見る夢のいまだ結びも果てぬに、

(卷三)

のように、言語主体の「疑い」の表現であり、また、7例は、地の文における用例で、

46(還御なりぬと聞けども、同じさまにて引き被きて寝たるに、いつのほどこにか、「御文」と言ふもあさまし。

(卷一)

47(照月といふ得選は伊勢の祭王がゆかりあるに、何としてこの浦にあるとは聞こえけるにか、「院の御所にゆかりある女房のもとより」とて、文あり。

(卷四)

のように、全例、挿入句的に使用されている。残りは、会話文における用例が7例、手紙文における用例が3例で、手紙文の用例は、48(起請文)心の内、さだめて牛王天童諸明王、験垂れたまふらむと思ひしに、いかなる魔縁にか、よしなきことゆゑ、今年二年、夜は夜もすがら面影を恋ひて、涙に袖を濡らし、

(卷二)

のように、挿入句的用法のものが2例、

49(有明の月)「はかなくなりなむ命よりも、思ひ置くことどもこそ罪深けれ。見しむばたまの夢もいかなることにか」と書き書きて、

(卷三)

のように、言語主体の「疑い」の表現と考えられるものが1例であるが、会話文における用例は、1例を除いて、

50「いかなる人の住まひ所、跡なくなるにか」と聞くほどに、「六波羅の南方、式部大輔討たれにけり。その跡の煙なり」と申す。

(卷二)

51(ここは須磨の浦と聞けば、「行平の中納言、藻塩垂れつつわびける住まひもいづくのほどにか」と、吹きこす風にも問はまほし。

(卷五)

52「いづれの御幸にか」と尋ね聞きまゐらすれば、「遊義門院の御幸」と言ふ。

(卷五)

のように、対話相手に対する「問い」の表現と考えられるものか、少なくとも、言語主体が対話相手に対して、自己の「疑い」を持ちかける意図のみられる表現であると思われる。

なお、この(d)形式の助詞「か」の代わりに、助詞「や」の使用されている、(n)「疑問詞——ニヤ。」の形式が1例みられるが、

53(御心の暇なく言ひわたりたまへるを、いかにしたまひけるに)や、神無月十日宵のほどに参るべきになりて、

(卷二)

のように、地の文において、挿入句的に使用されたものである。

六 「疑問詞——ヤラム。」の形式

『寛一本 平家物語』においては、「ニカ」の形を用いる(c)・(d)形式が全くみられなかったが、これらの形式に近似するのではないかと考えられる表現として、「ニヤアラム」から変化したと言われ、中世期に多用される「ヤラム」の形を使用した、(k)「疑問詞——ヤラム」の形式が全57例と多用されており、用法的にも、

54世にはいかにしてもれけるやらむ、哀にやさしきためしにぞ、人々申あへりける。

(卷第一 二代后)

のように、地の文で挿入句的に使用されている例や、

65(梶原)〈源太はいづくにあるやらん〉とて、数万騎の大勢のなかを、……、かけまはりたづぬるほどに、(巻第九 二度之懸)のように、心中思惟で、言語主体の「疑い」の表現として使用されている例とならんで、

66若公姫君筆をそめて、「さてち、御ぜんの御返事はなにと申べきやらん」ととひ給へば、(北の方)「……」とこそその給ひけれ。(巻第十 首渡)

のように、会話文において、対話相手に対する「問い」の表現として使用されている例もみられた。

当作品の場合、この(k)形式は全25例みられるが、そのうち21例までは地の文における用例で、

67身も、何とやらむ、ふるまひにくきやうにおほえ、女院の御方さまもうらうらとおおはします。(巻一)

68大納言声づくりて、何とやらむ、言ふ音して、帰りましたまひなどするが、(巻二)

69何事を「悪し」ともうけたまはることはなけれども、何とやらむ、御心の隔てある心地すれば、(巻三)

60「御鞆の折に違ふべからず」とてあれば、などやらむ、さるべしとおおほえず。(巻二)

61御添臥しにさぶらふも、などやらむ、むつかしくおほゆれども、(巻三)

のように、「何とやらむ」「などやらむ」の形が、それぞれ14例、5例と圧倒的に多く、全例が挿入句的に使用されている。また、会話文における用例全3例中の1例も、同様に、

『とはすがたり』の疑問表現(上)——要説明疑問表現の場合——

62(院)「……、何事につけてもなほざりならずおほゆれども、何とやらむ、わが心にもかなはぬことのみにて、心の色の見えぬこそいと口惜しけれ。……」など、昔の古事さへ言ひ知らせたまへば、(巻三)

のように、「何とやらむ」の形で挿入句的に使用されたものである。

「何とやらむ」「などやらむ」の形以外では、まず、63よろづ世の中物憂ければ、ただ山のあなたにのみ心は通へども、いかなる宿執なほ逃れがたきやらむ。(巻一)

64開けたれば、熊野の、またいづくのやらむ、本寺のとかや、牛王といふ物の裏に、(巻二)

のように、地の文における用例が2例みられるが、64の用例は、やはり挿入句的に使用されたものである。また、

65「……、へいにかかかる御政事もさぶらふやらむ」とおほえさぶらふ。……と仰せられしかども、(巻二)

のように、会話文中に引用された心中思惟の用例として、言語主体の「疑い」の表現として使用されているものが1例みられ、会話文における用例のうち、1例は、

66(男)「稻荷の御前をば御通りあるまじきほどに、いづ方へとやらむ、参らせおはしましてしかば、……」と言ふ。(巻五)

のように、挿入句的に用いられたものであり、

67(作者)「何とあることどもさぶらふやらむ。かくさぶらふを、御所にて案内しさぶらへども、御返事さぶらはぬ」と申せば、(玄輝門院)「我も知らず」とてあり。(巻三)

の1例のみが、対話相手に対する、丁重な「問い」の表現と考えら

れる性格のものである。

七 「疑問詞——ゾ」の形式

『源氏物語』や『寛一本 平家物語』の場合と同様、当作品においても、この(B)形式は、全64例中48例と、会話文における用例が圧倒的に多く、

(68)「雪の曙」「いでや、腰とかやを抱くなるに、さやうのことがなきゆゑに滞るか。いかに抱くべきことぞ」とて、かき起こさるる袖に取りつきて、事なく生まれたまひぬ。(卷二)

(69)ささぎの筆とも見えねば、(院)「いかなる人の形見ぞ」など、ねんごろに御尋ねあるもむつかしくて、ありのままに申すほどに、(卷二)

(70)新院、「雅忠卿女の歌など見えさぶらはぬぞ」と申されけるに、「勞りなどにてさぶらふやらむ、すんしうて」と御返事ある。(卷三)

(71)夜もすがら歌詠みなどするに、「涙川と申す川はいづくにはべるぞ」といふことを先の度尋ね申ししかども、知らぬよし申してはべりしを、(卷四)

(72)遊義門院「いづくより参りたる者ぞ」と仰せあれば、過ぎにし昔より語り申さまほしけれども、(作者)「奈良の方よりにてさぶらふ」と申す。(卷五)

のように、明確に解答を要求しようとする「問い」の表現として使用されており、身分の上位者から下位者へ対しての用例が目立つ。しかし、

(73)「作者」「御撫物、いづくにさぶらふべきぞ」と申す。(院)「道場のそばの局へ」と仰せ言あれば、(卷二)

(74)心得ずおぼえて、御所へ持ちて参りて、(作者)「かく申してさぶらふ。何事ぞ」と申せば、ともかくも御返事なし。(卷三)

のように、対話相手に対する敬語表現を含み、身分の下位者から上位者へ対する用例もみられるという事実は、この形式の要説明疑問表現における「問い」の形式としての一般化を示していると考えられよう。

この形式が心中思惟において使用された例は、『寛一本 平家物語』においては、わずか3例のみであったが、当作品の場合、

(75)障子の奥に寝たるそばに、馴れ顔に寝たる人あり。(こ)は何事ぞと思ふより、起き出でて去なむとす。(卷一)

(76)何となくなごり惜しきやうに、車の影の見られはべりしこそ、(こ)はいつよりのならはしぞ」と、わが心ながらおぼつかなくはべりしか。(卷二)

(77)「……」と仰せある御声は、さすが昔ながらに変はらせおはしまさねば、(こ)はいかなりつることぞ」と思ふより、胸つぶれてすこしも動かれぬを、(卷四)

のように、全16例みられ、『源氏物語』の場合と同じく、言語主体の強い感情表現として使用されているが、半数の8例は、「何事ぞ」「こは何事ぞ」「とは何事ぞ」の形で、いくぶん表現が類型化していると言える。また、『平家物語』では全9例みられた、地の文における用例は存在しない。

なお、文中に係助詞「か」が使用されていないながら、文末にさらに

助詞「ゾ」の存在している(h)形式が全4例みられるが、(78)院「など、これほど常の御所には人影もせぬぞ。ここには誰かさぶらふぞ」とて入らせおはしましたるを、(巻二)のように、全例、会話文における用例である。

八 おわりに

以上、『とはずがたり』の要説明疑問表現について、主として「覚一本 平家物語」の場合と比較しながら概観してきた。

文中用法の助詞「カ」を使用する(a)形式の場合、狭義の疑問表現よりも反語表現の用例が目立つが、その割合は「覚一本 平家物語」よりもかなり低く、「源氏物語」の場合に近い。また、その文末語についても、「ベシ」より「ム」の方が多く、「平家物語」とは事情が異なっている。しかし、中古の作品にはみられなかった、反語表現の場合に、「カ」の係る述語文節で文の完結しない用例が存在する点は、両作品に共通している。

「ニカ」の形を使用する(c)・(d)形式は、『平家物語』では全く用例が存在しなかったが、当作品では、両形式とも存在し、特に「ニカ」以下の省略された(d)形式の用例は多く、用法的にも中古の作品と同じく、心中思惟における「疑い」の表現、地の文における挿入句的用法とならんで、会話文において「問い」の表現として使用されている用例もみられる。

『平家物語』の場合、「ニカ」の形を使用する形式に近似する性格の表現として、中世期に多用される「ヤラム」の形を使用した(k)形式の用例が目立ち、用法的にも、心中思惟における「疑い」の表現、

『とはずがたり』の疑問表現(上)——要説明疑問表現の場合——

地の文における挿入句的用法、会話文における「問い」の表現がみられた。当作品においても、(k)形式の用例はみられるが、「何とやらむ」「などやらむ」の形で、地の文において挿入句的に使用されている例が圧倒的に多く、用法がかなり固定している。

文末用法の「ゾ」を使用する(g)形式の場合、会話文において「問い」の表現として使用されている用例が圧倒的に多く、要説明疑問表現における「問い」の表現として、この形式が主用されている点は「平家物語」の場合と共通であるが、「平家物語」と比較すると、心中思惟において、言語主体の強い感情表現として使用されている例も目立つ。

このように、『とはずがたり』の要説明疑問表現には、「覚一本 平家物語」の場合とかなり共通の要素がみられる一方で、むしろ中古の『源氏物語』の方に近い性格も存在している。『平家物語』と共通の要素は、中世的な語法の反映、また『源氏物語』の方に近い性格については、作品の内容に関わっていると考えられるのではないだろうか。

注

(1) 拙稿 a 「中古和文の要説明疑問表現——『源氏物語』を資料として——」(『日本文学研究』第26号、一九九〇年)

b 「今昔物語集」の要説明疑問表現——「疑問詞——ニカ。」形式を中心に——(『日本文学研究』第27号、一九九一年)

c 「平家物語」の要説明疑問表現(『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』(明治書院 一九九二年))

- d 「源氏物語」の要判定疑問表現——「ニヤ。」形式を中に——」(『日本文学研究』第28号(一九九二年))
- e 「今昔物語集」の要判定疑問表現(上)——本朝世俗部の場合——」(『日本文学研究』第30号(一九九五年))
- f 「今昔物語集」の要判定疑問表現(下)——天竺部・震旦部・本朝仏法部の場合——」(『日本文学研究』第31号(一九九六年))
- g 「平家物語」の要判定疑問表現」(『日本文学研究』第29号(一九九三年))
- (2) 森野宗明「国語史上よりみたる『讃岐典侍日記』の用語について——待遇表現を中心に——」(『佐伯博士古稀記念国語学論集』(表現社 一九六九年))
- (3) 拙稿「『讃岐典侍日記』の疑問表現」(『一の坂川/姫山 国語国文論集』所収(笠間書院 一九九七年五月刊行予定))
- (4) 拙稿「不定語「いかで」の構文的性格——意味用法・表現性をめぐって——」(『山口国文』第11号(一九八八年))
- (5) テキストには、「いかで今一度ものどかなる御ついでもや」のように、希望表現と考えられる例が1例みられるが、この例は底本では「かて」とあるものを「いかで」と校訂されたものであり、除外する。
- (6) 注(1)の拙稿c参照。
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(『東京大学出版会 一九六三年』)